

國學院大學學術情報リポジトリ

昭和後期のビジネス小説における依頼表現

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-02-26 キーワード (Ja): 依頼表現, 昭和後期, 男女差, 社内場面, 社外場面 キーワード (En): 作成者: 茅, 桂英 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000100

昭和後期のビジネス小説における依頼表現

茅 桂英

【キーワード】 依頼表現 昭和後期 男女差 社内場面 社外場面

1. はじめに

依頼表現の研究は数多くなされているが、ビジネス場面における依頼表現の研究は少なく、研究の余地はまだある。ことに、ビジネスパーソンが会話する際に社内の人物に対する場合と社外の人物に対する場合とで依頼表現にいかなる相違があるかについては興味深い課題である。これを検討するための言語資料としては現実のビジネス場面における会話は個人情報・企業秘密の観点から言語資料としては使用しにくい、これに準ずる資料としてはビジネス小説が有効であると考えられる。このビジネス小説は昭和戦後期から現れた分野で今日まで多数の作品があり、そのため言語資料としてもすでに史的変遷を検討し得る年月を有するに至っている。そこで、本稿では昭和後期に出版されたビジネス小説を調査資料として、昭和後期のビジネス小説における依頼表現の使用実態を明らかにする。

2. これまでの研究

工藤(1979)は昭和後期(戦後)の資料に現れた依頼表現を以下の表1のようにまとめている。

表1 昭和後期 工藤(1979)より

	肯定の依頼表現形式	否定の依頼表現形式
れ 「 て く て い ね い ↓	てくれ くれたまえ おくれ ください くださいまし(せ)	ないでくれ くれたまえ おくれ ください くださいまし(せ)

	てちょうだい	ないでちょうだい
	て	ないで
	てもらいたい	ないでもらいたい
	ていただきたい	ないでいただきたい
	てほしい	ないでほしい

工藤(1979)では「昭和後期に「てほしい」が盛んに使われるようになる。「ないでもらいたい」「ないでいただきたい」「ないでほしい」の例もみえるようになる」と指摘している。

3. 調査

3-1 調査目的

工藤(1979)によれば調査した文学作品には表1のような依頼表現が昭和後期に使用されているが、昭和後期のビジネス小説にはどのような依頼表現が使用されているのかを明らかにしたい。

3-2 調査資料

調査資料は以下の通りである。

城山三郎（1959）『総会屋錦城』文芸春秋新社

源氏鶏太（1960）『天下を取る』講談社

清水一行（1974）『動脈列島』光文社

高杉良（1979）『社長解任』グリーンアロー出版社

3-3 表現形式の分類

相原（2008）（注1）を参考にして表現形式を「直接依頼文」と「間接依頼文」に2分類し、それぞれをさらに3分類する。「直接依頼文」を「命令形で終わる文」「テ形で言いさす文」「＜依頼する＞旨を明示的に述べる文」に3分類し、「間接依頼文」を「肯定疑問文」「否定疑問文」「希望を述べるという形をとる文」に3分類する。また社内の人と社外の人に対して使用する依頼表現が違おうと予測し、社内と社外（注2）別に用例を収集して分析する。

3-4 調査結果の概観

「直接依頼文」は394例、「間接依頼文」は197例であり、「直接依頼文」は「間接依頼文」の2倍である。さらに社内・社外を問わず、「直接依頼文」が多く使われている。このうち、『社長解任』は他の3作品と異なって、社内

に「間接依頼文」が71例であり、特に多く使われている。その理由は話す相手が社長、副社長などの地位の高い人であるため「間接依頼文」を多く使用したのではないかと考えられる。このことから、「直接依頼文」と「間接依頼文」の使用には話す相手の地位による影響があるのではないかと考えられる。

依頼表現は4作品合計で591例使用され、そのうち、『社長解任』の用例は全用例の36%を占め、最も多い。『天下を取る』の用例は『社長解任』に次いで2番目に多い。また社内には338例、社外には253例使われており、『総会屋錦城』以外の3作品には社外場面より社内場面における依頼表現の用例数が多く見られる。依頼表現形式の種類について、「命令形で終わる文」「希望を述べるという形をとる文現」「テ形で言いさす文」の用例数は上位3位となっているが、「テ形で言いさす文」の使用において、作品による大きな差異が見られるが、その理由は後述する。「肯定疑問文」と「否定疑問文」の用例数はそれぞれ下から1位、2位となっている。特に「肯定疑問文」はいずれの作品でも用例が少なく、4作品合計で19例しか見られず、全用例の僅か3%を占めるにすぎない。

表2 4作品における依頼表現の使用状況

		『総会屋錦城』		『天下を取る』		『動脈列島』		『社長解任』		合計
		社内	社外	社内	社外	社内	社外	社内	社外	
直接依頼文 (394)	命令形で終わる文	16	17	26	26	20	26	55	33	219
	テ形で言いさす文	1	8	22	32	25	7	1	1	97
	〈依頼する〉旨を明示的に述べる文	9	7	13	7	4	4	21	13	78
間接依頼文 (197)	肯定疑問文	1	1	4	5	0	2	4	2	19
	否定疑問文	4	4	6	4	9	10	23	5	65
	希望を述べるという形をとる文	7	12	17	8	6	11	44	8	113
合計		38	49	88	82	64	60	148	62	591

4. 命令形で終わる文

4作品における「命令形で終わる文」の使用状況を表3に示す。表3に示す通り、社内場面では117例、社外場面では102例の合計219例使用されてお

り、全用例（591 例）の 37%を占め、最も多く使われる依頼表現形式である。そのうち、「てください」（「てくださいよ」などを含む）は 96 例、「てくれ」（「てくれよ」などを含む）は 94 例使われ、主な「命令形で終わる文」として使用されている。しかし、社内には「てくれ」（62 例）が最も多く使われるのに対し、社外には「てください」（52 例）が最も多く使われている。否定形式の「ないでくれ」「ないでください」の用例も見られる。さらに、工藤（1979）の調査資料に現れている「てくれたまえ」の用例（1 例のみ）も見られた。また「てくれ」と「てください」の使用においては作品による差異が見られる。『総会屋錦城』には「てくれ」18 例、「てください」13 例あり、『天下を取る』には「てくれ」33 例、「てください」15 例ある。1960 年ごろに出版されたこの 2 作品には「てください」より、「てくれ」が多く使用される傾向が見られる。

表 3 命令形で終わる文

		『総会屋 錦城』 (1959)	『天下を 取る』 (1960)	『動脈列 島』 (1974)	『社長解 任』 (1979)	合計
てくれ(94 例)	社内	9	20	18	15	62
	社外	9	13	4	6	32
てくれやす(1 例)	社内	0	0	0	1	1
	社外	0	0	0	0	0
てくれたまえ (1 例)	社内	0	0	0	1	1
	社外	0	0	0	0	0
てください(96 例)	社内	7	5	2	30	44
	社外	6	10	20	16	52
お／ご～ください (27 例)	社内	0	1	0	8	9
	社外	2	3	2	11	18
合計		33	52	46	88	219

一方、1970 年ごろに出版された 2 作品について、『動脈列島』には「てくれ」「てください」ともに 22 例あり、『社長解任』には「てくれ」21 例、「てください」46 例ある。このことから、1960 年代から 1970 年代にかけて、「てください」の使用が急増していると言えるのではないかと考えられる。その理由について、茅（2022）は 1970 年後半まで下位者に依頼する時に「てくださ

い」があまり使用されていないが、1970 年後半から下位者に依頼する時にも多く使うようになったと指摘している。

5. テ形で言いさす文

「テ形で言いさす文」の使用状況を表 4 に示すが、後ろに終助詞の付く場合が多いため、「～てよ」「～てね」などを分けて示している。4 作品合計で 97 例使われ、全用例（591 例）の 16%を占めている。「～て」は 53 例使われ、社内場面により多く使われている。また否定形の「～ないで（ね）」も 14 例見られる。さらに、97 例のうち、終助詞の付く用例は 39 例であり、このように「テ形で言いさす文」の後ろに終助詞が付きやすいと言える。

表 4 テ形で言いさす文

		『総会屋 錦城』	『天下を 取る』	『動脈列 島』	『社長解 任』	合計
て (53 例)	社内	0	17	18	1	35
	社外	3	10	5	0	18
てよ (13 例)	社内	0	1	3	0	4
	社外	1	7	1	0	9
てね(14 例)	社内	0	4	2	0	6
	社外	1	6	1	0	8
てな(1 例)	社内	1	0	0	0	1
	社外	0	0	0	0	0
てや (0 例)	社内	0	0	0	0	0
	社外	0	0	0	1	0
ないで (3 例)	社内	0	0	2	0	2
	社外	1	0	0	0	1
ないでね (11 例)	社内	0	0	0	0	0
	社外	2	9	0	0	11
合計		9	54	32	2	97

各作品の使用状況について、『天下を取る』には 54 例、『動脈列島』には 32 例、『総会屋錦城』には 9 例使われるのに対し、『社長解任』には 2 例しか使われていない。このように、作品による大きな差異が見られるが、その理由は例文を示しながら分析する。

(1) びっくりなさってはだめ、それに怒らないでね。

ミチ（女）→沖（男）（総会屋錦城 社外, p69）

(2) だったら、あたしに、とんかつをご馳走してよ。

安原（女）→大門（男）（天下を取る 社内, p58）

例（1）と例（2）の発話者は女性であり、発話者が聞き手と親しい関係にある。『天下を取る』の 54 例のうち、女性が 45 例（83%）使用しており、『動脈列島』の 32 例のうち、女性が 22 例（69%）使用している。一方で、『総会屋錦城』の 9 例のうち、女性が 5 例（56%）使用しており、『社長解任』の 2 例のうち、女性が 1 例（50%）使用している。以上のことから、「テ形で言いさす文」は男性より女性が多く使用することが明らかになった。これは小林（2003）による平成期に出版された資料の調査結果と一致している。そのため、「テ形で言いさす文」は昭和後期から平成期まで女性が多く使用していることに変わりがないと言えよう。『社長解任』に「テ形で言いさす文」の使用例が極めて少ない理由について、『社長解任』は社長、副社長、専務、常務などの立場の「上」の人の権利争いが描かれており、「テ形で言いさす文」は多く使用する女性の登場人物が少ないため、「テ形で言いさす文」の用例が少ないのではないかと考えられる。

6. <依頼する>旨を明示的に述べる文

「<依頼する>旨を明示的に述べる文」の使用状況は以下の表 5 に示す通り、4 作品合計で 78 例使われ、全用例（591 例）の 13%を占めている。また社内では 47 例、社外では 31 例使われ、社外より社内により多く使用する傾向が見られる。そのうち、「頼む（たのむ）」（よ）は 28 例であり、最も多く使われている。以下に「頼む」の例文を示す。

(3) 後をしつかり頼むよ。

岸田（常務）→風岡（課長代理）（総会屋錦城 社内, p180）

(4) そうだ、頼むよ。

人事係長→大門と亀村（新入社員）（天下を取る 社内, p40）

(5) ありがとう。それから、すまんがクルマの手配を頼む。

宮本（副社長）→黒川（専務）（社長解任 社内, p171）

例（3）から例（5）のように、社内場面では目上の人が目下の人に対して「頼む」を多く使う傾向が見られる。また 4 作品には女性が「頼む」を使用する用例が 1 例も見られず、全例の使用者は男性に限られている。そのため、昭和期

のビジネス小説の社内場面には目上の男性が目下の人に対して「頼む（よ）」を多く使用していると言えよう。特に『総会屋錦城』には「＜依頼する＞旨を明示的に述べる文」は16例のうち「頼む（よ）」は10例であり、他の3作品より使用率が高いが、これは株主総会を牛耳る総会屋の実力者が登場人物の人物設定が会話文に反映しているためと考えられる。

表5 ＜依頼する＞旨を明示的に述べる文

		『総会屋 錦城』	『天下を 取る』	『動脈 列島』	『社長 解任』	合 計
よろしく (5例)	社内					0
	社外		5			5
頼む（よ） (28例)	社内	7	7	1	7	22
	社外	3		2	1	6
頼みます (8例)	社内	1			6	7
	社外	1				1
願います (1例)	社内					0
	社外				1	1
お願い（する） (8例)	社内		1	1	2	4
	社外	3	1			4
お任せします (2例)	社内				1	1
	社外				1	1
（よろしく）お願いします (25例)	社内	1	5	2	5	13
	社外		1	2	9	12
お願いいたします (0例)	社内					0
	社外					0
よろしくお願い申 し上げます（1例）	社内					0
	社外				1	1
合計		16	20	8	34	78

「頼む（よ）」に次いで、「お願いします」が25例使用され、2番目に多く使われる「＜依頼する＞旨を明示的に述べる文」である。一方、「お願いいたします」の用例が見られず、「お願い申し上げます」は4作品合計で1例のみである。そのため、昭和期のビジネス小説には、社内・社外を問わず、「お願いいたします」と「お願い申し上げます」より「お願いします」が多く使用さ

れる傾向が認められる。また『総会屋錦城』には「頼みまっせ」、『社長解任』には「お願いしまっせ」などのような方言的な表現(注3)が見られる。

7. 肯定疑問文と否定疑問文

「肯定疑問文」の使用状況を表6に示す。

表6 肯定疑問文

		『総会屋 錦城』	『天下を 取る』	『動脈 列島』	『社長 解任』	合計	
てくる(の)か (4例)	社内	1	1	0	0	2	4
	社外	0	2	0	0	2	
くださる(の)? (2例)	社内	0	1	0	0	1	6
	社外	0	1	0	0	1	
くださるでしょうか (2例)	社内	0	1	0	0	1	
	社外	0	1	0	0	1	
くださいますか (2例)	社内	0	1	0	0	1	
	社外	0	1	0	0	1	
もらえるでしょうか(ね) (1例)	社内	0	0	0	0	0	2
	社外	0	0	1	0	1	
もらえますやろか (1例)	社内	0	0	0	1	1	
	社外	0	0	0	0	0	5
いただけるでしょうか (1例)	社内	0	0	0	0	0	
	社外	1	0	0	0	1	
いただけますか (4例)	社内	0	0	0	1	1	
	社外	0	0	1	2	3	
願えるか (1例)	社内	0	0	0	1	1	2
	社外	0	0	0	0	0	
お願いしてよろしいですか (1例)	社内	0	0	0	1	1	
	社外	0	0	0	0	0	
合計		2	9	2	6	19	

4作品合計で19例であり、全用例(591例)の僅か3%を占めているにすぎない。このことから、「肯定疑問文」はあまり使われていないと言える。また「願えるか」「お願いしてよろしいですか」の2例のほか、全ての用例は「て

くれる」「もらえる」などの授受表現に由来する表現である。そのうち、「てくれる」系 4 例、「てもらえる」系 2 例、「てくださる」系 6 例、「ていただける」系 2 例であり、「てくださる」系の用例は最も多い。「否定疑問文」の使用状況を以下の表 7 に示す。

表 7 否定疑問文

		『総会屋 錦城』	『天下を 取る』	『動脈 列島』	『社長 解任』	合計	
てくれないか（なア） (35 例)	社内	2	4	9	12	27	44
	社外	2	2	3	1	8	
てくれませんか (9 例)	社内	0	0	0	2	2	
	社外	1	1	4	1	7	
て下さいませんか (1 例)	社内	0	1	0	0	1	1
	社外	0	0	0	0	0	
てもらえないか（な） (3 例)	社内	0	0	0	2	2	8
	社外	0	1	0	0	1	
てもらえませんか (5 例)	社内	0	0	0	4	4	
	社外	0	0	1	0	1	
て頂けないか（なあ） (2 例)	社内	1	0	0	0	1	11
	社外	1	0	0	0	1	
て頂けませんか (でしょうか) (9 例)	社内	1	1	0	3	5	
	社外	0	0	1	3	4	
ねがえませんか (1 例)	社内	0	0	0	0	0	1
	社外	0	0	1	0	1	
合計		8	10	19	28	65	

表 7 に示した通り、「否定疑問文」は 4 作品合計で 65 例使用され、用例数は「肯定疑問文」の 3 倍以上である。さらに 4 作品のいずれも「肯定疑問文」より「否定疑問文」の方が多く使われている。また「ねがえませんか」（1 例）のほか、全ての用例は授受表現に由来する表現である。「てくれる」系 44 例、「てもらえる」系 8 例、「てくださる」系 1 例、「ていただける」系 11 例であり、「てくれる」系の用例は最も多い。

このように「肯定疑問文」の 89%、「否定疑問文」の 98%は授受表現に由来する表現である。そのうち「てくれないか」「てくれませんか」などの「て

くれる」系「否定疑問文」の用例は44例であり、他の表現より用例数が遥かに多い。さらに「肯定疑問文」と「否定疑問文」のいずれも「てもらえる」系より「てくれる」系の用例が多い。「てくれる」系、「てもらえる」系、「ていただける」系は「否定疑問文」が「肯定疑問文」より多く使われる。しかし「てくださる」系の「肯定疑問文」は6例であるのに対し、「否定疑問文」は1例のみであり、「肯定疑問文」の方が多く使われる。その上作品による大きな差異が見られ、『天下を取る』には7例使われるのに対して、他の3作品には用例が見られない。この差異が生じた理由について、他の3作品の作者はそれぞれ1927年、1931年、1939年の生まれであるのに対して、『天下を取る』の作者は1912年の生まれであることを考慮に入れると、生まれ年の違いによるものではないかと考えられる。

また「てもらえる」系は1960年代に出版された2作品には1例のみであり、1970年代に出版された2作品には9例である。このように1960年代から1970年代末にかけて、「てもらえる」系の使用が少し増加する傾向が見られる。「てもらえる」系と同様に、「ていただける」系の使用も増加する傾向が見られ、1960年代に出版された2作品には5例のみであるが、1970年代に出版された2作品には11例である。一方、「てくださる」系の用例が1960年代から1970年代末にかけて見られなくなる。北澤(2008)によれば、「～いただく」は依頼に対する受諾と行為という二重の恩恵を受けるという意味があり、「～くださる」より高い敬意が感じられる。また、「～いただく」の方が、動作主を明示しない分だけ、間接的で婉曲な表現であるとも指摘している。このような理由によって「てくださる」系より、「ていただける」系が多く使われるようになったのではないかと考えられる。

8. 希望を述べるという形をとる文

「希望を述べるという形をとる文」にあたるものを、山田(2004)は次の3つに分けている。

E 類 (条件+評価系) 依頼表現

F 類 (願望系) 依頼表現

G 類 (意志系) 依頼表現

これに倣って、ここでも、4作品の「希望を述べるという形をとる文」をこの3類に分けて使用状況を見ると、表8のようになる。

表 8 希望を述べるという形をとる文

	『総会屋錦城』		『天下を取る』		『動脈列島』		『社長解任』		合計
	社内	社外	社内	社外	社内	社外	社内	社外	
E 類（条件+評価系）依頼表現	2	1	2	0	0	0	1	0	6(5%)
F 類（願望系）依頼表現	2	7	12	6	5	10	41	7	90(80%)
G 類（意志系）依頼表現	3	4	3	2	1	1	2	1	17(15%)
合計	7	12	17	8	6	11	44	8	113

表 8 に示した通り、「てほしい」「てもらいたい」などの F 類（願望系）依頼表現は 90 例であり、「希望を述べるという形をとる文」（注 4）の 80%を占めている。特に『社長解任』には 52 例見られ、「希望を述べるという形をとる文」の全用例の 58%を占めている。一方で、「てくれたらいい」「てくれたらいいのだ」などのような E 類（条件+評価系）依頼表現は 4 作品合計で 6 例のみであり、あまり使われてない。「希望を述べるという形をとる文」の中で F 類（願望系）依頼表現が最も多く使われているため、主な F 類（願望系）依頼表現形式である「てほしい」「てもらいたい」「ていただきたい」の使用状況は以下の表 9 に示す通り、「てほしい」は 30 例、「てもらいたい」は 31 例、「ていただきたい」は 16 例使われている。以下に「てほしい」の用例を示す。

(6) これを最後の総会にして欲しいのだ。

錦城→間宮（総会屋元老錦城の部下）（総会屋錦城 社内, p18）

(7) そう言わずに私に協力してほしい。

島崎（副社長）→柚木（中央執行委員長）（社長解任 社内, p46）

「てほしい」は主に社内場面（24 例）に多く使われ、例（6）と例（7）のように、社内場面では目上の人が目下の人に対して「てほしい」を多く使い、目下の人が目上の人に対してあまり使わない傾向が見られる。小林（2003）の調査では女性が「てほしい」を使う用例が見られないが、本稿では女性の使用する用例が 5 例見られ、否定形の「ないでほしい」も見られる。また「てもらいたい」は「てほしい」と同様に、社内の目上の人が目下の人に対して多く使用するのに対して、「ていただきたい」は初対面や親しくない社外の人、または

社内の目下の人が目上の人に対して多く使う傾向が見られる。このように、場面や人間関係によって依頼表現を使い分けている。

表 9 主なF類(願望系) 依頼表現

	『総会屋錦城』 (1959 年)		『天下を取る』 (1960 年)		『動脈列島』 (1974 年)		『社長解任』 (1979 年)		合計
	社内	社外	社内	社外	社内	社外	社内	社外	
てほしい	2	2	1	2	2	0	19	2	30
てもらいたい	0	0	8	3	2	3	14	1	31
ていただきたい	0	3	3	1	0	2	3	4	16
合計	2	5	12	6	4	5	36	7	77

さらに工藤（1979）では第5期（昭和後期）に「てほしい」が盛んに使われるようになると指摘しているが、本稿の調査した1959年、1960年、1974年に出版された3作品には「てほしい」の用例はまだ少なく、それぞれ4例、3例、2例しか見られないのに対して、1979年に出版された『社長解任』には用例が倍に増加し、21例使われている。

9. まとめ

本稿では昭和後期に出版されたビジネス小説を対象資料として、依頼表現を抽出して考察を行い、以下のことを明らかにした。

(1) 社内・社外を問わず「間接依頼文」より「直接依頼文」が多く使われている。また「間接依頼文」と「直接依頼文」の使用において、男女差があまり見られないが、社内場面では地位による影響が考えられる。「てください」「てくれ」などの「命令形で終わる文」は最も多く使用される依頼表現形式である。そのうち、社内には「てくれ」、社外には「てください」が最も多く使われる依頼表現形式である。目上の男性が目下に対して「てくれ」を多く使う傾向が見られる。一方、女性が「～て」「～ないで」を多く使用する傾向が見られる。このように、現代語において男女の言語表現の接近が指摘されるものの、昭和後期のビジネス小説においては男女差が依然として存在すると言えよう。

(2) 「肯定疑問文」より「否定疑問文」の方が好まれていることが明らかになった。しかし、「てくださる」系のみは「肯定疑問文」の方が多く使われる傾向が見られる。さらに「肯定疑問文」と「否定疑問文」のいずれも「てもらえる」系より、「てくれる」系の用例が多い。特に「否定疑問文」は「てもらえないか」「てもらえませんか」などの「てもらえる」系（否定形）より、「てくれないか」「てくれませんか」などの「てくれる」系（否定形）の方が用例は遥かに多い。昭和後期のビジネス小説には「てくれる」系は主流(注 5)であると言える。

(3) 「希望を述べるという形をとる文」について、「命令系で終わる文」に次いで、2 番目に多く使われる依頼表現形式である。そのうち、「てほしい」「てもらいたい」などの F 類（願望系）依頼表現は最も多く使われている。「てほしい」と「てもらいたい」は社内の目上が目下に対して多く使用するのに対して、「ていただきたい」は初対面や親しくない社外の人、または社内の目下が目上に対して多く使う傾向が見られる。このように、昭和後期のビジネス小説は場面や相手によって依頼表現を使い分けている。

(4) 「てほしい」の使用について、工藤（1979）は「てほしい」が昭和後期から盛んに使われるようになると指摘しているが、『総会屋錦城』（1959 年）、『天下を取る』（1960 年）と『動脈列島』（1974 年）の 3 作品には「てほしい」の用例はそれぞれ 4 例、3 例、2 例の合計 9 例しか見られず、『社長解任』（1979 年）の 1 作品のみには 21 例使われることから、ビジネス小説における「てほしい」の使用は 1960 年代、または 1970 年前半にはまだあまり使われず、1970 年後半以降に盛んに使われるようになったと指摘できる。

しかし、小林（2003）の調査した 2000 年前後の資料には、「てほしい」は 2 例のみ見られ、その上 2 例とも男性が使用しているが、昭和期の末期から現在に至るまでの「てほしい」の使用状況の変遷、または使用の男女差については、今後の課題とする。

注

(1) 相原（2008）の分類は Blum Kulka（1989:18）を参考にしたものである。Blum Kulka（1989）は、間接的な方略が習化されているか否かを基準にさらに下位分類しており（習慣化されていないものを「ヒント」と呼ぶ）、その点は異なる。

(2) 同じ会社の人に依頼する場面を「社内」用例として収集し、取引のある他の会社の人や客に依頼する場面を「社外」用例として収集した。家族内の会話や仕事関係で

はない相手との会話を対象外にした。また、本稿では相手との関係は社内か社外かによって分類し、発話の場所を考慮に入れなかった。

(3) 「頼みませ」を「頼みます」、「お願いませ」を「お願いします」に集計して表5に示している。

(4) 平成期のビジネス小説ではE類（条件+評価系）依頼表現、F類（願望系）依頼表現、G類（意志系）依頼表現の使用率はそれぞれ17%、68%、15%であった(茅(2022))。昭和期から平成期になって、E類（条件+評価系）依頼表現の使用の増加傾向が見られる。

(5) 平成期のビジネス小説では、(テモラウ系) 依頼表現が多く使われている(茅(2022))。このことから、昭和期から平成期になって(テモラウ系) 依頼表現の使用が広がっていると言えよう。

参考文献

- 相原まり子(2008)「依頼表現の日中対照研究—相手に応じた表現選択—」『言語情報科学』6, 東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻, pp1-18
- 北澤尚(2008)「「～いただきますようお願い申し上げます」と「お～くださいますようお願い申し上げます」」『近代語研究』14, 武蔵野書院, pp343-358
- 工藤真由美(1979)「依頼表現の発達」『国語と国文学』56(1), 明治書院
- 小林美恵子(2003)「職場における命令・依頼表現—ジェンダー的視点から見る—」『ことば：研究誌』24, 現代日本語研究会, pp13-25
- 茅桂英(2021)「ビジネス文書マニュアル本における依頼表現」『国学院大学大学院紀要文学研究科』53, 国学院大学大学院, pp53-77
- 茅桂英(2022)「「てください」の使用状況の変遷について—ビジネス小説を調査対象として—」第32回国学院大学日本語教育研究会発表資料
- 茅桂英(2023)「平成以降のビジネス小説における依頼表現」『東アジア文化研究』8, 掲載予定
- 前田広幸(1990)「「～て下さい」と「お～下さい」」『日本語学』9(5), 明治書院
- 森田良行(1985)「私は要りません。持ってください」『誤用文の分析と研究：日本語学への提言』明治書院
- 山田敏弘(2004)『日本語のベネファクティブ—てやる」「てくれる」「てもらう」の文法—』明治書院

—国学院大学大学院博士課程後期—